



発行所 独立行政法人 国立病院機構 西別府病院
 住 所 〒874-0840 大分県別府市大字鶴見4548番地
 TEL 0977-24-1221 FAX 0977-26-1163
 ホームページアドレス <http://www.nbnh.jp/>
 印 刷 有限会社 中央印刷



新春賀



別府市

目 次

ご挨拶	2	第3回別府市	
医局紹介 『摂食嚥下(のみこみ)外来』のご紹介	4	「アール・ブリュットの芽ばえ展～障がいをごえて～」 ..	10
第71回国立病院総合医学会に参加して	5	クリスマス会☆2017	11
報告平成29年度 重症心身障害児(者)医療に関する研修 ～重心医療について知ってみよう～	6	地域医療連携室だより	12
腎臓病教室を開催して	7	職場紹介	13
2017年健康フェアを振り返って	8	人事異動	13
リレー・フォー・ライフに参加して	9	外来診療担当表	14
ゆめ水族園を開催して	10	ボランティア募集	14

理 念 私たちは、常に研鑽し、患者さまのために最良の医療を提供します

基本方針 1. 患者中心の医療 2. 患者の権利と尊厳を守る 3. 政策医療の推進 4. 地域医療への貢献
 5. 最良・安全医療の提供 6. チーム医療の推進 7. 経営基盤の確立

患者さまの権利 1. 良質で安全な医療を受ける権利 2. 十分な説明を受け、質問する権利
 3. 自分で医療の内容を決定する権利 4. プライバシーを保護される権利 5. カルテ開示を受ける権利
 6. セカンドオピニオンを受ける権利 7. 臨床研究への参加と拒否の権利

新年を迎えて



院長
後藤 一也

明けましておめでとうございます。

皆様におかれましてはつつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

年頭にあたり、これからの当院の取り組みをまじえてご挨拶申し上げます。

国の医療施策について、地域医療構想策定ガイドラインが示されて3年が経過する中で、去年は「公的医療機関等2025年プラン」作成など、各医療機関のより具現化した対応が求められました。これからも、当院の医療機能はセーフティネット系医療を提供していくことに変わりありませんが、機構本部が示しているように、①地域の中で果たすべき役割、②慢性期病床の中での位置づけの2点をより明確にしていく必要があります。平成30年度は、診療・介護報酬改定、第7次医療・介護保険計画の開始など、「惑星直列」と称される大改革の年度となります。あわせて病院に

は収支状況の改善や長時間労働の抑制などが求められる中、職員一丸となってこの難局に立ち向かわなければなりません。

平成29年度の病院目標として、1. 病院機能を高め、地域・在宅医療に貢献する(チーム医療を推進し、医療の質を高め、地域、在宅医療に貢献する)、2. 経営基盤を確立する(患者数確保とともに、経費節減、効率的な業務遂行、会議運営に努める)を掲げました。二項目は、上述した医療、経営環境への対応のあり方に即したものであり、残りの3か月間、目標達成に向けて日常業務に励むとともに、平成30年度のステップアップにつなげるべく、検証、改善計画立案に努めます。

本年も引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしく願い申し上げます。皆様のご健勝とご発展を祈念致しまして、新年の挨拶とさせていただきます。

新年のご挨拶



副院長
原 政 英

謹んで新年のお慶びを申し上げます。旧年中は県内の医療機関の皆様には大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

さて、当院は平成29年度の目標として「チーム医療の推進」を掲げています。昨年11月には病院目標を達成するためにも必要なツールである電子カルテを更新いたしました。新機能の調整が終了すれば病院目標を実践していく上できわめて有用な媒体となってくれるものと期待しています。

さらに2月には「チーム医療を通じた医療の質の向上」をテーマとした日本医療マネジメント学会第18回大分県支部学術集会(会長：後藤一也院長)を控えており、鋭意準備中です。すでに多くの皆様からご支援を賜っており、衷心よりお礼申し上げます。そして3月にはこれまでの決算ともいべき病院機能評価を受審予定であり、院内のシステム点検を急ぎ行っ

ております。なかでも、2016年4月に発生した熊本大分地震を教訓として、大規模災害に対する当院の機能に則した防災マニュアル作成と、それに基づく訓練は欠かせないものと考えております。また、新年度には国立病院機構病院間での医療安全相互チェックが計画されています。高齢化が進む中、当院でもフレイルによる転倒転落、それに伴う骨折事例が増加しております。医療の質と安全、それを支えるのがチーム医療であることをいま一度念頭に置き、医療安全対策に取り組んでまいります。

早いもので副院長を拝命して今年が4年目となります。新電子カルテシステム導入と病院機能評価受審という病院として節目の年を迎え、気持ちを新たにしております。新年もご支援のほど何卒宜しく願い申し上げます。新しい1年が皆様にとりまして良き年になりますよう心よりお祈りいたします。

新年を迎えて

事務部長

河野 完治

初春のお慶びを申し上げます。

新春を迎え皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

昨年4月に当院の事務部長として赴任して9ヶ月が過ぎ、新しい年を迎えることができました。

昨年の出来事として世界では、米国トランプ大統領就任に始まり、ロシア・欧米諸国のテロ、北朝鮮の相次ぐミサイル発射と世界情勢が不安定な年でした。また、国内においては築地移転問題、安部首相夫妻が関連する森友学園・加計学園問題、元大相撲横綱日馬富士の暴力事件等、毎日ワイドショーを賑わせてきました。

一方、西別府病院では、院内保育所への落雷事故、冷温水発生器の故障、そして病院の一大イベントでも

ありました電子カルテの更新。同一メーカーへの更新と言うことで、安心して11月6日を迎えましたが…。

しかし、最も危惧しなければならないのは、当院の経営です。ご案内のとおり電子カルテの更新等の費用増もあり、非常に厳しい収支状況となっており、その対策が急務となっております。この4月には診療報酬・介護報酬の同一改定時期が予定されており、当院にとってさらなる逆風が待ち構えております。外来・一般病棟・管理棟建替工事実現のため何としてでも基盤安定が必須です。職員一同気持ちを一つにしてこの難局を乗り切りましょう。その実現に向け微力ながらこの1年邁進して参りたいと思います。

本年も何卒よろしくお願い致します。

新年のご挨拶

看護部長

松山 恭子

謹んで新春のご祝詞を申し上げます。

昨年は、酉年で羽ばたき発展する飛躍の年でしたが、皆さまにとってどのような1年だったでしょうか？

私は昨年4月に着任し、病院を取り巻く環境は、急性期医療だけではなく、当院のような慢性期や障害者医療の施設までもが非常に厳しくなっていることを実感しています。その中で、看護部が果たす役割は何か、今できることは何かを追求しながら取り組んでまいりました。病院目標は、1. 病院機能を高め、地域・在宅医療に貢献する2. 経営基盤を確立する。キーワードは「チーム医療」「効率的な運営」「一層の経費節減」と捉え、アクションプランを掲げました。院内におけるチーム活動の推進、会議の見直し、スケジュール管理の徹底、物品定数の見直し、倫理行動の周知徹底等、推進していく中で、看護力の大きさを感じています。

約20年振りの西別府勤務。得意とする専門的な看護技術の提供と新しい分野への柔軟な対応ができるよう、付度しながら努めていきたいと思っております。

2017年、毎年恒例の世相を表す漢字に選ばれたのは「北」。北朝鮮のミサイル発射が影響したのか、ベスト10に入った漢字は、不穏な負を連想する文字が並びましたが、年末には上野動物園のパンダ「香香(しゃんしゃん)」のお披露目で、愛らしいしぐさに心がなごみました。

今年、平成30年戌年、戊戌(つちのえいぬ)の年。戊と戌は陰陽五行説では比和の関係で、同じ気が重なると、その気は盛んになり、明暗がはっきりわかれる、分岐点を迎える年になりそうです。前向きに地道な努力を重ねることができかどうかで運気は大きく変わる年。今まで頑張ってきたことをこれからも引き続き取り組んでいくことで、この厳しい状況を乗り越えていけると信じています。

今年4月は診療報酬、介護報酬改定もあり、一層厳しくなりそうな医療環境ですが、当院にとってプラスに転じられるよう、職員一丸となり、ワンランクアップを目指してまいりましょう。どうぞ本年もご協力をお願いいたします。

医局
紹介

『摂食嚥下(のみこみ)外来』のご紹介

歯科 尾崎 由 衛

『摂食嚥下障害』をご存知ですか？

摂食嚥下障害とは、「食べる」、「飲み込む」ことが困難な状態です。この状態は、「食べる」機能を獲得することが困難な場合と、一度獲得した「食べる」機能が低下した場合があります(図1)。現在、「食べる」に困難さを感じていない人にとって、なかなか理解しにくい「食べる」ことの困難さですが、「食べる」時には、30種類もの筋群を動かし、喉を詰めることや誤嚥することなく、良いタイミングで「嚥下」を行っています。また、一度に口の中に取り入れる量(一口量)の調節や、食べやすい姿勢で食事を行うことも特段意識せずに行っていると思います。この「食べる」「飲み込む」という意識的にも無意識的にも行っている機能は、機能的な発達と形態的な成長の中で反復して練習され、習得されています。離乳食を始めたばかりの子供が“とり天”を食べられないのは(あげないと思いますが)、歯が生えそろっていないという形態の問題以前に、舌や口唇が“とり天”を食べるのに必要な動きがまだできないという機能的な問題があります。また、機能と乖離した食物を提供することは、喉を詰めてしまう(窒息)危険がありますし、「食べる」機能の発達を阻害することにつながります。この「食べる」機能(摂食嚥下機能)を無視してしまうと今挙げた窒息だけでなく、誤嚥や誤嚥が原因となり肺炎を生じたり、食べること、飲みこむことが負担となってしまう、低栄養や脱水、食べる楽しみの喪失を生じたりすることがあります。

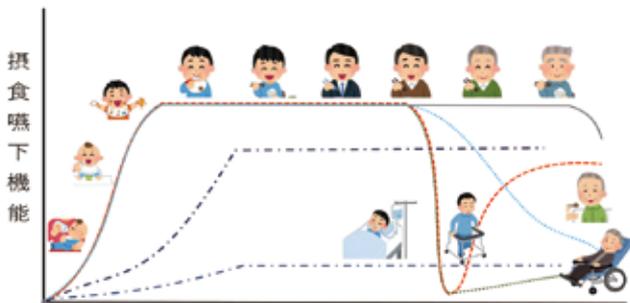


図1. 食べる機能の推移

摂食嚥下(のみこみ) 外来の役割

このように「食べる」「飲み込む」ことが困難である方々を支援(サポート)することを目的として、平成29年12月1日に『摂食嚥下(のみこみ)外来』が当院に開設されました。この外来では、具体的にどのような

ことを行うのかを説明いたします。食べるのが困難と一言で言っても、その困難さは多岐にわたっています。食べこぼしてしまう、よく噛めない、口の中に食物がたまってしまふ、特定のものとむせる、何を食べてもむせる、唾液でもむせる、むせないが誤嚥性肺炎を繰り返しているなど、人によって困難さは異なります。また、「食べる」ことが困難な方の生活を支えている人にとっては、どのようなものを、どのように食べさせてあげればよいのか、何か効果的な対応はないのかといった悩みが生じることがあります。このように摂食嚥下障害の症状や悩みは、人それぞれであるため、初診時には既往歴、服用薬、お困り事に関する問診を中心に行います。その後の受診時に普段食べている食物や食べさせてあげたい物などを持参していただき、食べる場面の観察(外部観察評価)と必要に応じて嚥下内視鏡検査(図2)や嚥下造影検査などの精密検査を行い、具体的な「食べる」機能の問題点を診ていきます。評価・検査の結果から、食事に関する条件設定(食物形態、食事時の姿勢、食事介助法、飲み込み方など)や機能訓練法の提案をさせていただきます。

摂食嚥下障害のある方を支えるために大事なことは、まず、「気づく人がいる」こと、次に「相談する窓口」があり、「どこに問題があるのかを検討」し、「対応」し、「情報を共有しながら生活を支える」ことです。

「食べる」ことは単なる栄養補給ではなく、生活の中の「楽しみ」です。『摂食嚥下(のみこみ)外来』は「食べる」を通じて生活をサポートさせていただきたいと願っています。



図2. 嚥下内視鏡検査

担当医師

尾崎由衛(歯科医師)

2002年 広島大学歯学部卒

歯学博士、日本老年歯科医学会認定医

摂食機能療法専門歯科医師

日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士

第71回国立病院総合医学会に参加して

歯科衛生士 原 徳 美

平成29年11月10日(金)から11月11日(土)にかけて香川県高松市において「第71回国立病院総合医学会」が開催されました。当院からも多くの職員が参加し、日ごろの取り組みについて発表しました。その中で歯科衛生士の原 徳美さんがベストポスター賞を受賞しましたのでご紹介致します。

11月10日に香川県高松市で開催された、国立病院総合医学会に参加させていただきました。初日の特別講演では、中村修二(カリフォルニア大学教授)ノーベル物理学賞受賞者の「LED開発までの苦勞～日本とアメリカの違い～」を拝聴いたしました。2014年の青色LEDを発明した経緯と日亜化学工業時代のご苦勞したことなど、興味深く、楽しくあっという間に時間が経過しました。

私の今回の発表は、摂食嚥下・口腔ケアチームの取り組みについてまとめてみました。

急性期病院における周術期の取り組みにたいする発表はたくさんありますが、療養型での取り組みは少なく、たくさんの方が、ポスターセッションに集まってきてくださいました。

また、ポスター発表は、国立病院総合医学会、初のeポスター形式で、大型モニターを使用し行うため、大変緊張しました。口腔内環境が改善したことを、評

価していただきポスター賞をいただくことができました。質問もたくさんいただき、千葉東病院の大塚歯科医師から、「重症心身障害児(者)で、改善されなかった症例は、今後どのように取り組んでいきますか。」との質問があり、「オーダーメイドの口腔ケアを病棟リンクナースに伝達し、ボトムアップしていきたい。また電子カルテも運用し歯科衛生実施指導が、スタッフ間で共有できツールになると望ましいと感じている。」と返答いたしましたら、同意をされていました。また、病院全体で取り組んでいることが素晴らしいので、ぜひ研究継続をとの励ましの言葉もいただきました。これも、日頃から、研究協力いただいているチーム、歯科スタッフ、患者様のおかげだと感謝し、当院の歯と口の健康が、守れるよう日々研鑽していきたいと思えます。国立病院総合医学会に参加させていただきました。ありがとうございました。

演題番号 P2-2P-855 演題 摂食嚥下・口腔ケアチームでの口腔機能評価と細菌叢の推移
 氏名 原 徳美 HARA NARUMI
 所属 独立行政法人国立病院機構西別府病院 歯科 歯科衛生士 Dental Hygienist Hishibettu National Hospital

目的
 当院は、重症心身障害、神経難病、認知症、脳梗塞を中心とした350床の療養型の病院である。今回、NSTの小部門である摂食嚥下・口腔ケアチーム(以下NST)でおこなったROAG(Revised Oral Assessment Guide)口腔機能評価と口腔内細菌叢からチーム医療での口腔ケアの重要性を報告する。

対象および方法
 (期間) 平成28年4月～平成29年3月
 (対象) 6-NSTにリンクナースから依頼があった患者29名(男性19名、女性10名)平均年齢61.8±24.9(5～101歳)
 (方法) 歯科衛生士が口腔ケア指示書を作成しリンクナースに実施指導そのナースが伝達指導した病棟看護士が毎日口腔ケアをおこなった。歯科医師と歯科衛生士が2週間に1回、指導効果のモニタリング実施。口腔ケア指示書・チェックシートを用い、歯科衛生士が実施指導。口腔機能シートROAG(8点から24点) 細菌カウント Penicillin-DB-ACOD 手拭拭一のためお昼の口腔ケア後に歯科衛生士が実施。チーム会議(3ヶ月)前後の比較を実施

結果
 ROAG平均16.7→14.8(p<0.05)改善21/28名
 細菌カウント平均4.21 × 10⁷ → 2.29 × 10⁷ (p<0.05)減少した18/28名

考察
 6-NSTのチームで活動を行い、歯科衛生士の看護士に行った口腔衛生実施指導が、細菌カウントで数値化するにより口腔内環境の改善傾向につながったと考える。またすべての対象者が改善できなかった理由として、口腔ケアの伝達と継続性の困難と安のべていた。
 チームで活動を行い口腔内の重要性を看護士に伝えることができ、口腔への関心が上がった。これからは療養型病院での口腔ケアの必要性をチーム医療の立場から発信したいと考える。

課題
 リンクナースと連絡調整のシステム構築
 口腔ケアの継続
 マンパワーの不足



NHO PRESS

検索



西別府病院は、国立病院機構(NHO: National Hospital Organization)という142の病院からなる国内最大級の病院ネットワークの病院です。

国立病院機構(NHO)という病院ネットワークが、どのようなグループでどのような活動をしているのかを紹介する『NHO PRESS～国立病院機構通信～』を発行しています。当院では外来に設置していますので、ぜひご覧になってください。

なお、ホームページに最新号と過去のもの掲載していますので、そちらもぜひご覧になってください。「NHO PRESS」で検索してください。



おしらせ

報告

平成29年度 重症心身障害児(者)医療に関する研修
～重心医療について知ってみよう～

院長 後藤 一也

機構本部が主催する重症心身障害児(者)医療に関する研修～重心医療について知ってみよう～が今年度は当院が当番となり研修企画にあたり、12月7日、8日に当院療育支援棟ホールにて開催されました。この研修は若手医師に重症心身障害児(者)医療の現状、実践されている最新の診断・医療および福祉の所見を知り、情報・意見交換の場とすることを目的とするものです。企画にあたり、①この分野の経験者による総論的解説の講演、②九州グループ内機構病院の診療内容紹介、③当院スタッフの業務内容紹介、④在宅医療の解説を研修のねらいとしました。全国各地から18名の受講者が参加されました。

研修オリエンテーションから始まった2日間の研修の中で、九州グループ管内の施設として、福岡東医療センター、福岡病院、熊本再春荘病院、南九州病院、長崎病院の医師および理学療法士の講演も行ってもらいました。高知病院の武市先生も講師に加わってもらいましたが、先生には12月6日にも気管支ファイバー実技講習を行って頂き心から感謝申し上げます。当院からは、小児科内山先生の「重症心身障害児の基礎疾患」、能美療育指導室長の「重症児に関わる福祉サービス」、播磨副師長(東3)の「看護師の視点から」、原歯科衛生主任の「重症心身障害児・者の口腔機能と口腔ケア」、阿部臨床工学主任の「重症心身障害児(者)と人工呼吸療法」などの講演とともに私と石和言語聴覚士から外来患者さんの提示を行いました。総論的解説講演として、第1日目にはびわこ学園医療福祉センター草津の口分田政夫先生、第2日目には、南京都病院の宮野前健先生の講演があり、職員にも聴講してもらいました。その他、当院の数多くの患者さんの手術をして頂いた寺倉宏嗣先生、熱心に在宅医療や障害者歯科に取り組んでおられる是松先生、佐藤先生の講演も示唆に富むもので、研修目的を達することができたと思います。

研修1日日夜には芙蓉倶楽部にて意見交換会が開かれ、親しく交流する場となるとともに、受講者の自己紹介では熱心な前向きな思いが語られ、参加者にとって楽しく、有意義なひと時になったことと思います。

2日間の研修を通して、受講者の皆さんには重症心身障害医療の概要を把握し、関心をもってもらえたかと思えます。これもひとえに講師の方々や、機構本部医療部や当院職員の皆さま方のご支援、ご尽力のおかげと心から感謝申し上げます。



腎臓病教室を開催して

経営企画係長 小池 由 哉

去る12月1日(金)、当院カンファレンス室にて第15回腎臓病教室を開催いたしました。

この教室では、当院小児科の平松先生と植村先生を中心に各職種からメンバーを集め、医師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士といったスタッフが、それぞれの専門的な知見を活かして、腎臓病の治療法や患者さんに求められる生活習慣について講義を行いました。当日は腎臓病の患者さんやご家族、学校の養護教諭など、30名の方にご参加いただきました。

前半の部では、腎臓専門医、循環器専門医、薬剤師による講義を行いました。腎臓専門医からは腎臓病の症状や検査・治療法について、循環器専門医からは腎臓病と心臓病の関係について、薬剤師からはお薬を服用する際の注意事項などについて、それぞれお話がありました。



後半の部は、腎臓専門医、理学療法士、管理栄養士の講義でした。腎臓専門医からは、腎臓の機能や透析、最新の腎移植技術についての講義がありました。理学療法士からは腎臓病の患者さんの適度な運動の必要性について、管理栄養士からは食事療法について説明を行いました。



講義の後には腎臓病食の試食会を行いました。塩分を減らすための調理法についての解説を交えながら、当院の栄養士が作った皿うどんやライスコロケ、うどんドーナツなどを提供しました。参加者の方々は「おいしい」と言いながら召し上がっていました。

腎臓病の治療には長い期間がかかることが多いため、症状改善のためには普段の生活習慣を見直すことが大切です。この教室でお話した内容が、腎臓病で治療中の方やその周囲の方々に少しでもお役に立てれば幸いです。



2017年健康フェアを振り返って

副院長 原 政 英

今年度の健康フェアは10月28日(土)(10:00～14:00)に開催されました。雨天にも関わらず多くの皆様にご参加いただきましたことに心より感謝いたします。

後藤院長による開会挨拶の後、健康コーナー(身体測定、健康相談、リハビリ、AED講習)、出店コーナー(農産物、焼肉、バザー、ソフトクリーム、ネイルアートなど)、ならびにイベントコーナーが催されました。雨を避けるためメイン会場を外来棟とし、バザーや食品販売の出店は外来ホールおよび通路を利用して行いましたが、滞りなくプログラムを進行することができました。



健康相談は例年の賑わいぶり



「西別府温泉地獄バンド」に大拍手



新鮮な野菜販売は大人気

健康相談(血管年齢、骨密度、心電図他)には例年通り大勢の相談者が訪れ、住民の皆様の健康に対する変わらぬ関心の高さを知ることができました。人気のイベントコーナーでは、アニメソング専門バンド「アニソン・バンズ」と当院職員による「西別府温泉地獄バンド」が、いずれも高い演奏力で有名な楽曲を次々と披露し喝采を浴びていました。さらにドナルド・マクドナルドによる楽しいステージショー、そして「GRACE」によるゴスペルの荘厳な歌声と研ぎ澄まされたハーモニーはまさに病院祭の締めくくりにふさわしいものでした。

この度のイベントに参加ご協力いただいた多くの団体の皆様と、多忙の中、企画と開催準備に関わっていただいた職員の方々に深謝いたします。当院はこれからも健康フェアを通して患者様や地域の皆様との「ふれあい」を大切にしたいと考えています。そして年1回のこの催しが診療、保健、ならびに療育に対する当院の取り組みを理解していただく良い機会であり続けることを願っています。



リレー・フォー・ライフに参加して

庶務係長 山内浩史

11月3日から4日にかけて「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2017大分」が開催されました。今年は延べ6,000人の参加があったそうです。「リレー・フォー・ライフ」とは「サバイバー」（がん患者・経験者）やその家族を支援するチャリティー活動で、その締めくくりとして上記の日程で24時間タスキを繋いで歩くりレーイベントを行います。当院も例年通りリレーイベントに参加し、電子カルテシステム更新日と重なる日程ではありましたが、多くの職員が参加しました。私は今回初めて参加し、リレー参加はもちろん、募金のための飲物販売の手伝いや発電機の管理など行いました。

イベントではステージでの催しもあり、がんを乗り越えたサバイバーの方々、また現在闘病中のサバイバーの方々の経験談などのリアルなお話は聞き入ってしまうものでした。また、フラメンコやベリーダンスなどの催しもあり、とても賑やかなものでした。

リレーでは西別府チーム（「いつまでもあなたと一緒にあるき隊」）で24時間タスキを繋いだのですが、チームの垣根を越え参加チーム間で繋ぐタスキも用意され、サバイバーに対するイベント参加者全員の思いが一つにまとまったようでした。

私は仮眠などとりながら、自分のペースで歩いていましたが、寝ずに歩いた唐原外科部長と阿部主任臨床工学技士のお2人はそれぞれ70km程歩いたそうで、その熱意に感嘆しました。

また、イベントではサバイバーへの思いなどを書いた「ルミナリエ（白い紙袋）」がリレーコースに多数並べられます。夜はそれらの中にもろうそくが灯され、リレーコースが暖かい明かりで包まれる光景は幻想的で一見の価値ありだと思います。

例年10月に行われているリレー・フォー・ライフですが、今年は一ヶ月遅い11月の開催で、気候も若干冬の様相を呈し、夜は凍える寒さでしたが、イベントをやり終えるころには、なんともいえない達成感を感じることが出来ました。



ゆめ水族園を開催して

療育指導室
児童指導員
馬・渡・里・子

2017年11月15日(水)に当院の療育支援棟ホールにてエプソン主催の「ゆめ水族園」が開催されました。「ゆめ水族園」とは、感覚器官・こころ・身体を通じて、ゆるやかで、適度な刺激を受け豊かな質感を感じてもらうためにエプソンが開発・提案している映像投影空間を提供するものです。大分県では初めての開催となりました。



病院の利用者の方や職員以外にも、地域の方や支援学校の生徒・職員ら、合わせて約500人が来られ「ゆめ水族園」を楽しまれました。

療育支援棟に入ると、優しい音楽とともに、天井や壁に水中の生き物が映し出されていました。ホールに入ると、そこはいつも目にしていないホールではなく、1つの大きな水族園でした。上下左右どこを見ても、水の中の生き物が映し出されており、中には旭山動物園をモチーフにした映像もありました。ホールの中を歩いて行くと、白い柔らかい布が私達を待っていました。布には、クラゲやカクレ



クマノミ、金魚などの海の生き物が映し出され、その布の中を通ることができます。

クマノミ、金魚などの海の生き物が映し出され、その布の中を通ることができます。

利用者の方は、映し出された水中の生き物を目で追ったり、捕まえようと手を伸ばしたり、うれしそうなお声を出したりしていました。療育支援棟に入るまでは、大きな声を出したり、自傷行為があったりした利用者の方も、支援棟に入ると、心身共に落ち着き、映像美に引き込まれているようでした。また、「水族園に1回しか行ったことがないから、久しぶりに見ることができて嬉しい」、「音楽と映像が合っていて、リラックスして見ることができた」等の声も利用者の方から聞かれました。



当院の中には、その日の体調などでホールに行くことができない利用者の方がいます。その方達も楽しめるよう、病室にファンタスカーという機械を持って、ホールと同じように病室の壁や天井に水中の生き物の映像を映していました。外出する機会が少ない利用者の方達にとっては、とても良い経験となったことだと思います。

当院の中には、その日の体調などでホールに行くことができない利用者の方がいます。その方達も楽しめるよう、病室にファンタスカーという機械を持って、ホールと同じように病室の壁や天井に水中の生き物の映像を映していました。外出する機会が少ない利用者の方達にとっては、とても良い経験となったことだと思います。

第3回別府市「アール・ブリュットの芽ばえ展 ~障がいをこえて~」

療育指導室長
能美 禎夫
(別府市アール・ブリュットの芽ばえ展副実行委員長)

第3回別府市「アール・ブリュットの芽ばえ展~障がいをこえて~」が、ゆめタウン別府店で11月18日(土)から11月24日(金)に開催されました。

今年の当展示会のチラシは、当院の日中一時支援事業「ひだまり」の利用者Tさんの絵と入所しているNさんの題字が採用されました。西別府病院からも、入院患者さんや日中一時支援事業の利用者の方も書、詩、絵画などの作品を出展しました。会場では熱心に作品を鑑賞している多くの方を目にし、大分合同新聞、今日新聞にも大きく取り上げられていました。



クリスマス会☆2017

保育士 森・本・明・美

今年のクリスマス会は東1病棟12月20日、東2病棟19日、東3病棟14日、東4病棟13日、東5病棟22日に各病棟内で開催し、それぞれ趣向を凝らした楽しい内容でした。

まず、東3、4病棟のテーマは「歌って踊って楽しもう!」ということで、今の人気芸人に扮したスタッフによる出し物を行いました。その後、利用者がスタッフと一緒にツリーにライトを飾り、完成したイルミネーションの光を観賞したり、クリスマスソングを合唱したり、最後は、サンタクロースに扮した医師や病棟師長よりプレゼントを受け取り、笑顔いっぱいの楽しいひと時を過ごしていただきました。



サンタからのプレゼント
(東1・2病棟)



サンタからのプレゼント
(東1・2病棟)



クリスマス会会場(東3・4病棟)



西別府温泉地獄バンド

東5病棟ではクリスマスの雰囲気病室内を装飾し、木琴、鉄琴、ハンドベル、ツリーチャイム、鈴等の楽器でクリスマスソングを利用者やご家族と一緒に歌いました。



サンタからのクリスマス
プレゼント(東3・4病棟)



スタッフによる楽器演奏
(東3・4病棟)



スタッフによるミニコンサート(東5病棟)

続いて、東1、2病棟のテーマは「みんながハッピークリスマス!」。開始時間になるとドラえもんやオラフ等のキャラクター、戦隊ものに扮した療育指導室スタッフや病棟スタッフが病棟内に現れました。そして、病棟ナースステーション前で昨年6月に病院スタッフで結成された「西別府温泉地獄バンド」の生演奏を披露してもらい、病棟内でのバンド生演奏は迫力ありました。日頃の雰囲気と違ったスタッフの姿に利用者も驚き、素敵な時間を過ごしていただくことができました。また、「恋ダンス」の歌が始まると、会場にいたスタッフが一斉に踊りだし更に盛り上がりました。

最後に、行事に際し多くのボランティアのご協力、スタッフのご尽力を心より感謝申し上げます。



地域医療連携室だより

地域医療連携係長
佐藤 恭子

レスパイト入院のご案内

西別府病院では、神経筋難病患者様のレスパイト入院の受け入れを行っています。お気軽に地域医療連携室にお問い合わせください。

レスパイト入院とは

神経筋難病の患者様の中には、気管切開を受けている方や、人工呼吸器を装着され、常時、吸引等の医療的な管理や介護を受けられている方がいらっしゃいます。そのような患者様を在宅で長期に支えられているご家族のために当院では「レスパイト入院」を受け入れています。

「レスパイト」とは、休息・息抜きを意味します。在宅における介護者（ご家族）の休養を図ること、入院中に医療行為（検査、胃瘻交換など）を行うことを目的としています。

さらに当院では、レスパイト入院中のリハビリテーション、栄養指導などの提供も行っています。

利用対象者

神経筋難病患者でレスパイト入院を希望されている患者様

入院期間

- ①入院期間は、1カ月以内とします。
- ②年間4回まで（3カ月毎に1回）とします。
- ※ 緊急時は、ご相談に応じ、調整させていただきます。



レスパイト入院予約の流れ



注意点

- ①初めて、当院へのレスパイト入院を希望される患者様は、原則、初回外来受診をお願い致します。（※緊急時の場合においては、かかりつけ医より直接、当院神経内科部長への連絡をお願いします。）
- ②入院が決定しましたら、ケアマネージャー等に、移送方法の手段をご相談し、ご連絡ください。
- ③「特定医療費（指定難病）受給者証」をお持ちの方は、医療機関の追加を必ず済ませてください。
- ④入院当日は、入院受付窓口へおいでください。ご家族は、入院申込みをお願い致します。
- ⑤当院は、病衣の貸し出しは行っておりません。衣類は持参していただくようお願い致します。

退院時：退院の際は、西別府病院地域医療連携室より紹介元医療機関様へ退院のご連絡を差し上げます。また、「診療情報提供書」を作成（FAX、郵送）させていただきます。

職場紹介

- ・ 心理療法室
- ・ 東2病棟

心理療法室



心理療法室は、外来、入院の患者様への心理検査や心理療法を行っています。

外来診療においては、主に小児精神科医師や小児科医師と連携し、発達障害、ストレス障害の子どもたちへの心理的支援を行っています。具体的には、心理・発達検査、カウンセリングに加え、「ペアレントトレーニング」、「ソーシャルスキルトレーニング (SST)」など、行動療法理論に基づいた活動にも取り組んでいます。

また、すべての診療科における入院中の患者様への心理的支援や、療養介護サービスを利用されている患者様への心理的支援もしています。

心理療法士の役割は、患者様や家族の心に寄り添い、本来持っている心の強さを引き出すことだと考えています。日常生活に「困り(生き辛さ)」を抱えている患者様やその家族が、少しでも「前向きに(生きやすく)」なるように努めています。

(主任心理療法士 橋本裕貴)

東2病棟



東2病棟は筋ジストロフィー、神経難病、重度心身障害者が入所している療養介護病棟です。神経・筋難病という特徴から日常生活支援や人工呼吸器装着患者の呼吸管理を中心に援助を行っています。コミュニケーションに障害のある患者も多く、個別性に応じた伝達方法を選択し、小さなサインも逃さないようにして日々の観察や異常の早期発見などにつとめています。

『患者が安全で安楽な入所生活を送れる』を病棟目標に掲げ、医師・看護師・療養介助専門員・保育師・リハビリのスタッフ・臨床工学技士など多職種と連携をとりながら、チーム医療を行っています。また、医師・看護師・保育士と協働でレクリエーションを行っており、夏場は院外レクリエーションに参加するなど患者のQOLの向上に努めています。

毎月懇談会を実施し、患者・家族の意向を尊重しながら日常生活の援助を行っています。

患者の生活の場であるこの病棟で患者の気持ちに寄り添い、その人らしい生活を送るためにどうすれば良いか検討しながら看護を実践しています。

(東2病棟師長 安森洋美)